



工学研究科長 就任にあたって

工学研究科長・工学部長
桑畑 進

令和4年4月1日に工学研究科・工学部長を拝命致しました。本会会長である豊田政男先生が工学研究科長であった平成17年に国立大学が独立法人化し、その時に分子創成化学専攻と物質機能化学専攻の代議員（後の専攻長）を拝命した時から、工学研究科の運営の仕事に携わることとなりました。馬場章夫先生、掛下知行先生（本会副会長）が研究科長の時には工学研究科のテニユアトラックプログラムの運営委員長を、田中敏宏先生（現 副学長理事）の時には教務委員長を務め、そして、馬場口登研究科長の下で教育研究評議員として、研究科長をサポートするとともに、工学研究科と全学の諸問題に対処してまいりました。このように歴代の研究科長の活動を目の当りにする者として、それを他の方に伝えるのに「化け物」と表現しておりました。決して悪い意味ではなく、朝から晩まで会議や接客の連続で、全国や海外を飛び回り、どのような議題であってもその中心的内容は言うまでもなく、周辺の話についても膨大な知識を有し、夕刻になると複数の懇親会の挨拶をこなす、そしてお酒はべらぼうに強い。このような超人的な活動ぶりを表現するのに「化け物」を使い、そこには「私にはとても無理だ」という気持ちも込めておりました。この度、工学研究科の構成員の皆さまにご支持頂き、研究科長に選ばれた時、頭に過ったことは「私は化け物になれるのだろうか？」でした。しかし、諸先輩方からご教示頂き、皆様から応援の言葉を頂き、今は工学研究科一の化け物となって、「阪大工」の存在価値を今以上に日本、否、世界に知らしめるべく努力したいと存じております。

大阪大学工学部は、毎年、厳しい入学試験に合格する約3,300人のうち、その4分の1である約840人が入学するという、阪大の中で最大の学部です。大学院生（修士）もほぼ同数が入学してきますので、毎年の卒業生数は千数百人にもなり、社会で活躍しております。「インターネット等のネットワークが無かった時は、卒業生同志が連絡し合って情報交換していましたが、今はネットワークでいかなる情報も入手できるので、卒業生間の連絡が希薄になった」とよく言われますが、今の学生と話をすると、決してそうではありません。就職活動の時期に、「ネットワークに出ている情報はどれも同じようなもの。本当の情報を知るために、この研究室を卒業された先輩と話をさせて下さい」との依頼があります。そういう場面に出くわす度に、卒業生同志の連絡が担保できる同窓会の重要性を感じるとともに、それこそが「阪大卒」というブランドを守ることにそのものであると確信しております。個人情報保護法で情報交換が難しい今こそ、本会を通して情報交換ができる場をつくり、阪大卒ブランドの社会的価値を高めたいと存じますので、本会会員の皆さまのご支援とご協力を心からお願いする次第です。

（応化 昭和57年卒 59年前期）



工学研究科長 退任にあたり

大阪大学名誉教授
馬場口 登

令和元年8月26日に工学研究科長・工学部長を拝命し、本学教職員の皆様のご助力、ご厚情を得まして令和4年3月31日まで無事勤め上げることができました。在任中は、大阪大学工業会の皆様から多大なるご支援、ご鞭撻を賜りました。ここに衷心より感謝申し上げます。

さて、皆様ご高承のように、令和2年の春に出現した新型コロナウイルスは、2年余を経た今でも大きな影響を及ぼしております。三密、マスク着用、ソーシャルディスタンス、テレワーク、時短、人流抑制、黙食など、これまで想像もしない生活様式、労働環境に直面してきました。大学においてもオンライン講義、ハイブリッド講義、講義・試験室での感染防御（着席間隔、常時換気）などのコロナ対策で右往左往しました。まさにコロナ禍（下）の研究科長というべき約30か月でした。

このような環境においても工学部・工学研究科から優れた卒業生、修了生を途切れることなく送り出すことができましたことは、大きな喜びとするところです。とはいえ、コロナ前と同質の教育を学生に成しえたかについては少々疑問符が付きます。学生生活において2年という時間は極めて大きく、貴重なものです。特に、他学から阪大の教育研究に憧れて大学院に入学した学生が、国際・国内会議の現地発表、研究室旅行、新歓・追い出しコンパなど、以前なら当り前の研究室生活を体験することなく卒業してゆくことに、痛恨の思いが個人的にはあります。

在任中最大のイベントは、令和2年度の研究科改組を機に誕生したテクノアリーナの整備でした。「最先端研究拠点部門」「インキュベーション部門」「若手卓越支援部門」の3つの“山”からなる新しい教育研究体制は、令和3年の春に全容が揃いました。学術ピーク、最先端イノベーション、産官学共創、多分野連携、学際融合、社会実装、Junior Facultyの充実に大きな役割を果たし、阪大が掲げるOU（研究開発）エコシステムを強力に駆動してくれるに相違ありません。

加えて、私は阪大工学部・工学研究科のブランディングを重点課題として捉え、種々思索を続けてまいりました。工学部の強みや特長は何か。何を社会にアピールすべきか。どこに向かって進んでいくのか。Well-Being、Carbon Neutral、Sustainable-Resilienceな社会を実現すべく、我々がそれらのDeep-Techを追求していく姿は見えて来ましたが、このブランディングの最適解を探索することは後進に託したいと考えます。

大学そのものが、現在大きな変革点にいます。10兆円ファンド、大学債、国際卓越研究大学など新たな概念が怒涛のように押し寄せてきています。工学部・工学研究科はそのスケールと実力から、阪大の中核を担わねばなりません。桑畑研究科長のもと一丸となってこの変革点からの一大飛躍を遂げて頂きたいと思っております。最後に、大阪大学工業会の皆様には、終始変わらぬご指導、ご支援をお願いし、退任のご挨拶とさせていただきます。

（通信 昭和54年卒 56年前期）